

創刊にあたって

博物館と調査研究

林屋辰三郎

日本の博物館の創立は、一体どの時期に起点を置けばよいのか、必ずしも一定していない。最もふつうには「開館」という事実が挙げられるが、そのほかにも明治四年（一六七二）四月、「古器旧物保存」の太政官布告にもとずき列品の収集が開始された時も考えられるし、官制の公布された時もまた有力な誕生日である。

現に京都国立博物館の場合、明治八年（一八七五）四月に開設された京都府博物館の旧藏品一千余点を、明治十六年（一八八三）閉鎖ののち京都府引継として承けついでいる。そうすればすでに満百二年を経過していることになる。さらに国立の博物館として帝国京都博物館が官制上創設されたのは、明治二十二年（一八八九）五月のことで、本年は満九十年に当たっている。その後明治二十五年（一八九二）六月から陳列館の建設にかかって三年余、明治二十八年（一八九五）十月に現在重要文化財に指定されている旧館が竣工した。そして明治三十年（一九一七）五月一日に開館の運びとなったのであるが、本年は満八十二年である。これまで本館では、その時期の便宜に従い創立を祝ってきたようだが、正確を期すれば国立博物館として、本年は創設九十年、開館八十二年に相当するのである。

その間の歩みは、昭和四十二年（一九六七）度刊行の「京都国立博物館七十年史」に詳しいが、周知のように本館は大正十三年（一九二四）皇太子殿下御成婚記念として京都市に下賜され、ながらく恩賜京都博物館と

して市の運営に委ねられ、昭和二十七年（一九五二）に至って文化財保護委員会（のちに文化庁）の所管となつて、現在の姿となつた。思えば新しい制度となつてからも四分ノ一世紀を越しているのである。

この長い歴史を通じて、博物館はもっぱら文化財の収蔵・管理、展示・解説を主要な業務として運営され、立派にその役割を果してきた。しかしわたくしにはようやく新しい在り方が模索される時期が到来したように思える。

それは博物館を日本という文化国家の核として積極的に位置づけることである。時勢の進運は、博物館に対して単なる文化施設、社会教育機関としての役割だけではなく、いっそう大きな学術研究機関としての使命を要請していると思う。そのことは西に東に、すでに開かれた民族学、近く生れる歴史民俗などの博物館が、国際的な文化交流や日本人の国民的認識の上に果しました果すであろう役割を考えると、それらへの期待が、共通して研究機関としての博物館の成果に向けられていることに気付かれるであろう。古い革袋をもつ国立博物館も、そこに新しい酒をもるべき時節ではなからうか。たとえば文化財の展示・解説一つをとらえても、十分な調査研究に裏打ちされて、はじめて光彩を放つことはいうまでもない。それは個々の文化財の製作年代・技術的特色などの研究はもとより、それらを創り上げ生み出した歴史・社会にもふれて、文化財の正確な位置づけが必要なのである。

これまでも、本館においてはそうした調査研究に配慮を怠ることなく、現在普及事業の一環として列品講座や、講演会において研究の一端を公開しており、また館内外の研究者によって学術研究講座が新設された時期もあった。しかし博物館自体が研究機関として位置づけられることがなかったから、せっかくの学術研究の芽も成熟しなかったのである。他方において進められている協力諸財団からの委託研究も、館員諸氏の学問的意欲がある程度満足させるものとして有難いことであるが、これをもって博物館自体の業績に代えられるもので

はなかった。

このように考えると、新しい国立博物館の方向は、学術研究機関へ向けての一步前進が最も重要であると言えよう。そのための第一は、資料研究センターの併設である。ここに文化財の調査研究に必要な、すべての資料を蒐積して、ひろく学術研究のための利用をはかることが肝要である。出来得れば現在建設進行中の文化財保存修理所も、保存修理に関する資料の整備とその公開を将来の展望の中に含めることがのぞましいであろう。第二には、館員諸氏の自覚もまた重要である。それには研究者としての各人の素質をみきわめ、才能を充分に発揮できる条件を設定せねばならないと思う。とくに各室のジャンルをこえた共同研究も必要になる。第三に、そうした研究機能を促進するには、博物館自体が、積極的にその討論の場を準備するように努めねばならないであろう。実はその目的のために、本館はこの京都国立博物館「学叢」を創刊することとしたのである。あたかも創設九十周年に際会したことをささやかながらも記念し、かつ学術的研究の成果を公刊する場として、本誌を提供しようとするのである。その意味で、本学叢によせる期待は、きわめて大きいのである。

この刊行計画は、昭和五十三年四月に館員全員の協賛のもとに発足し、約一ケ年の執筆期間をもって印刷のはこびとなった。今後も当分は年一回刊行の予定である。題字は初唐三大家の一人褚遂良（ちよすいりょう）（五九六―六五八）と伝える法帖のうち、「学」は太宗哀冊、「叢」は北周庾信（ゆしん）の枯樹賦よりそれぞれ集字したものである。末永く「学叢」の行方を暖かく見守っていただき、ご協力をお願いする次第である。なお出版に当り財団法人清風会のご援助を蒙った。ここに厚く御礼を申し上げます。

昭和五十四年三月